

選 評 いい作品と出会って、オリジナリティーに磨きを

藤田 のぼる

今回は、最終選考に残った作品がやや横一線という感じで、それほど大きな評価の差はありませんでした。そうした中で、優秀賞になった「涙色のレインコート」は、作品のまとまりという点で、やはりひとつ抜けでていました。

主人公の遺書めいた手紙から書き出されますが、今ひとつ一般的というか、迫力不足。そのことは主人公自身が自覚していて、自分のマイナスの感情自体に確信がもてないという感覚は、けっこう多くの人たちに共通する思いなのではないでしょうか。そして、この作品のポイントは、なんとといっても「天国」からやってきたという少女と主人公が入れ替わるところ。ありがちなお話のようであり、収容所というか、訓練施設のような「天国」という設定は、ユニークでおもしろいと思いましたし、そこでの体験もきちんと描かれていました。最後は少し感傷的なきらいはありますが、それまでの展開からして、読者は充分結末に納得できるのではないのでしょうか。そして、ほかの作品に比べて、内容と長さのバランスがいい、つまり書きすぎているところや書き足りないところがなく、とてもスムーズに読める文章でした。

これに対して、奨励賞の「泉の底に」は、意欲作ではありましたが、作品として未解決な部分がいくつか残されていました。これは時代ファンタジーで歴史小説ではないので、多少の無理はがまんするとしても、たとえば主人公の〈私〉の母親は、村の老人が語ったように若いころにこの村にやってきて、その時点で自らの感情を封印していたとすれば、どのような経緯で二人の子どもをもうけるようになったのか、父親はどうなったのか……。もちろん作品にすべて書く必要はありませんが、そうした「裏設定」が作者の中でイメージされているかどうかは、作品の厚みというか、リアリティーに大きく影響してきます。自分の感情を外に出さない（出せない）親と子の葛藤、そして和解というテーマには大きなドラマを感じるだけに、そのあたりさらにいろんな作品を読んで勉強してください。

長編特別賞の「時の脈」ですが、400字で120枚という長編でした。大学受験を意識しつつ、今ひとつ本気になれない高校一年の主人公。そんな心の隙間に入り込むように、I-podから不思議な音楽とメッセージが流れてきます。主人公の生活に、現役の教師、かつてこの高校にいたらしい若い女性教師の人生が交錯してくる物語で、長編としてのスケールの大きさがありました。ただ、これだけの長さをこなすには、もっと組み立てというか、構成をきちんとしなければなりません。まずはいくつかの章に分けて、全体の流れを見えやすいようにする必要があります。それから、ピアノが作品の中で大事な役割を果たしている割には、音楽に関する記述で間違いが散見されました。そのあたりは、ピアノに強い友達にチェックしてもらおうなど、他の人の手を借りてもいいと思います。

作品で一番大切なのはオリジナリティーですが、しかしそれを獲得する途上では、好きな作品をいい意味で真似たりということもあります。いろいろな作品に触れて、「自分もぜひこんな作品を書きたい」という作品から、どんどん影響を受けてほしいと思います。